（様式３）

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	富山県	市町村名	高岡市	大学名	
派遣日	令和５年８月４日（金曜日）　１３：４０～１６：４５ ※研修実施要項は別添 １　開会・挨拶 ２　アドバイザーによる講演、演習 「外国人児童生徒への対応について」 －日本語指導が必要な児童生徒への支援－ ３　閉会・挨拶				
実施方法	※いずれかに〇をつけてください。　（派遣）　／　遠隔				
派遣場所	戸出コミュニティセンター （富山県高岡市戸出町二丁目 13 番 4 号）				
アドバイザー氏名	港区立麻布小学校　主任教諭　花島　健司　氏				
相談者	高岡市教育委員会・高岡市教育センター				
相談内容	〇教職員研修の講師を希望 〇指導助言の対象者：高岡市立学校教員等　計２０名参加 〇研修について 研修名：外国人児童生徒教育研修会 趣旨:外国人児童生徒の日本語の能力を把握するためのアセスメントや学習指導について学ぶとともに、個々に対応できる指導力の向上を図る。 ＜現状＞ ・高岡市は、富山県内の他市町に比べ、外国人児童生徒の在籍数が多い。 ・日本語を話し、理解できる児童生徒がいる一方で、日常会話にも支障をきたす子供もいるなど、様々である。特に、日本語が理解できない保護者が多く、連絡等には、通訳が必要な場合がある。 ・日本語で日常会話ができても、教科学習に困難を感じている児童生徒が多い。また、日本語能力を把握できないまま指導している場合もあり、実態に応じた手立てが難しい。 ・日本語を理解できない保護者の場合、意思疎通が難しく、学校と家庭との連携をどのように図るのか、工夫が必要である。 ・各教員が、外国人児童生徒等の日本語能力や学力を適切に把握し、評価する方法を熟知した上で指導するために、教員の研修を意図的・計画的に進める必要がある。				
派遣者からの指導助言内容	＜研修内容＞ (1)外国人児童生徒等の受け入れの状況について (2)子どもの発達とことばの習慣について (3)ことばの力について (4)ことばの力をどうとらえるかについて (5)日本語指導の実際について (6)校内の指導体制とその他機関等の連携について				

（様式３）

	＜指導助言＞ ・本研修におけるキーワードは、多文化共生である。 外国人児童生徒等が日常会話を習得するために１～２年かかると言われている。さらに、教科学習で必要とされる言語能力を習得するためには、５年以上かかるとも言われる。日本語が分からない子供たちの思いを多面的にとらえることが大切である。 ・ジェスチャーのみでコミュニケーションをとるゲームや外国人児童生徒等が経験していると思われる様々な場面を寸劇で表現する演習を行った。この演習は、多文化によって様々な価値観があることを体験するためのものである。また、文化の違いによるトラブルが起きやすいことも理解することもできる。 ・文化間移動した子供たちは、アイデンティティのゆらぎや学校生活での戸惑いなど、様々な困難を抱えることもある。日本語、母語・継承語、それぞれでの経験が合わさって、子供の人間的発達が促される。そこで、それぞれの言語での経験、学びをトータルに捉える必要がある。 ・外国人児童生徒等のことばの力を捉える方法として、ＤＬＡがある。また、日本語の力を伸ばすためＪＳＬカリキュラムを活用し、多面的な支援を取り入れることが効果的である。 ・日本語指導を行う上で、子供の実態を多面的に把握することが大切である。子供の発達状況や育った環境、学習歴、生活面での経験、前の国での学習歴や経験等、保護者等からしっかり聞き取りをした上で、個別の指導計画を作成する。その内容は、日本語担当教師、在籍学級担任等で共有し、外国人児童生徒等への学習や生活面での支援・指導に生かす。 ・教科学習等への支援については、やさしい日本語（はっきり、最後まで、短く話す）を意識することが大切である。支援の例として、保護者宛てのお知らせを分かりやすいものに作り変える演習を行った。挨拶文を省略し必要なことだけを短い文にまとめたり、イラストを入れたりするなど、外国人児童生徒等や保護者の立場になって支援することが大切である。 ・外国人児童生徒等への支援を効果的に行うためには、日本語担当教師、在籍学級担任、管理職、専門機関等と連携を図り、組織的に対応することが大切である。そのためには、外国人児童生徒等についての共通理解や情報共有が重要である。まずは、外国人児童生徒等教育担当を校務分掌に位置付け、校内体制を整えていくことで、学校全体での組織的な支援を実現させていく。保護者や専門機関等とも連携を図り、多面的な支援を行うことが重要である。
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	＜受講者からの意見・感想＞ ・文化の違いから受けるとまどいを、ゲームや劇を通して少し体験することができ、子供が受けるであろうカルチャーショックを考えるきっかけになった。親の都合で来日している場合も多いので、心の面からのサポートも必要だと感じた。 ・一概に言語能力といっても、生活言語能力と学習言語能力の２つを習得する必要があり、特に後者は習得に時間がかかることを改めて理解できた。多文化共生を図るためにも、改めて易しい表現、優しい気持ちを意識して児童・生徒と接していきたい。 ・外国人児童生徒等が抱える困り感を、役割演技を通して学んだ。日常会話ができ

（様式３）

	ても、学習言語を身に付けるのに５年以上かかることから、小学校の段階で話す・読む・書く・聴く力をつけるような指導を続けることが大切だと思う。学習でつまずきそうなところを予測して、手立てを考える必要があると思った。日本語指導が必要な子供に対して、取り出し指導ができる体制づくりや指導形態についても教えていただき、とても参考になった。 ＜今後の取組等＞ ・外国人児童生徒等への教育や対応についての悩みや質問等について、前もって受講者からアンケートをとり、その悩みや質問に応じた内容の講義や演習をしていただいたことで、受講者は、より必要感をもって研修することができた。 また、演習等を通して、より具体的な場面を想定して意見を交流し、自分たちの悩みや対応策についても情報交換することができたことで、受講者からの評価も高かった。 ・研修内容は、受講者がそれぞれの勤務校において伝達講習等で報告し、全教員で共有して、今後の支援等に生かす。 ・今後も外国人児童生徒等教育に関する学校現場等の悩みや課題を把握し、それに対応したテーマを設定し、研修を継続していきたい。